日本語における”identity”
-形容詞「-イ」「-タイ」比較から-

鈴木　梓
名古屋大学大学院国際言語文化研究科
azusa-27@hotmail.co.jp

1.　はじめに

日本語には、ごくわずかであるが「-イ」「-タイ」両形を持つ形容詞が存在する。授業などで主に使用されるのは「-イ」形だが、実際の使用状況を見ると「-タイ」の使用も少なくなく、使用者は何らかの意識を持って使い分けを行っているようである。ではその使い分けは何によるのか。今回、母語話者と学習者を対象にアンケートを行い、使い分けに差があること、そして発話者の「経験者」意識が使い分けの基準となっているのではないかという考察結果を得た。

発話者は、発話内容が受話者とどの程度共有されていると考えるか、つまり情報量によって使い分けているようだ。今回は「-イ」「-タイ」にのみ注目したが、発話者と受話者の情報の共有は、広く心情述語全般に言えそうである。形容詞、動詞、「-ガル」などの選択も経験者の範囲や「情報量」と関係するようである。心情述語は本来「経験者」にのみ明らかな心理状態の描写だが、日本語では「経験者」が発話者だけでなく受話者も含みうる。経験者の範囲は何により、どこまで広がるのだろうか。その範囲は日本語の特徴の一つとされることも多い「ウチ」「ソト」「ヨソ」意識とも関係しているのではないか。そして「ウチ」の中心とされる「自（分、己)」、identity の位置づけにも影響してくるのではないだろうか。この点で既存の考察に加え、英語の identity を意識しない日本語の特性により沿った分類が可能になるのではないか。

本稿では「情報のなわ張り」（神尾 1990、1998、2002）を援用概念とし、「情報量」という概念を用いて以下の三点について一定の考察結果を得た。すなわち「ウチ」「ソト」「ヨソ」は曖昧かつ階層的であること、その別は「情報量」に拠り、「主題」(THEME)[2]への情報の多寡[3]で表しうること、日本語の中心は「主題」であり、これまでの identity ではないこと、の三点である。

2. 先行文献

前述のように、「ウチ」「ソト」「ヨソ」に関して他言語と比較した研究は多い。カンボジア、タイなど敬語を頻用する社会では敬語対象か否かという点が通じると感じる学習者も少なくないし[4]、韓国語・中国語などとの差異も報告されている[5]。しかし多くの場合、基準として血縁や社会的関係など社会学的要素を都合よく利用しているように思われる。本稿では語用論的な立場から論ずることとし、神尾（1990、1998、2002）に近い立場を取る。

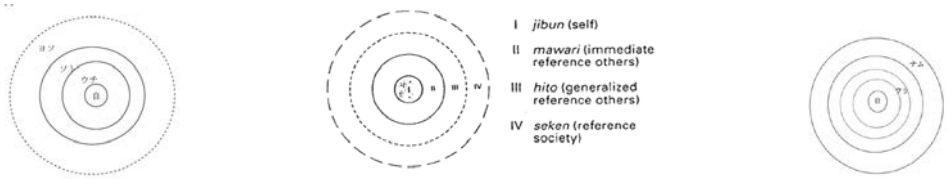

図 1 ウチ・ソト・ヨソの人間関係モデル(三宅 1995) The Reference other model (Kuwayama 1992)　韓国のウリ・ナム(嚴 2012)

3.「-イ」「-タイ」形容詞についての仮説

「-イ」「-タイ」の両方を持つ形容詞は少ない。本稿で扱うのは「重（た）い」「煙（た）い」「眠（た）い」「ウザ（った）い」[6]の４種である。これらの語から以下のような仮説を立てる。

情報の共有度：動詞＞-ガル[7]＞…形容詞イ＞形容詞タイ

また、情報の共有度が神尾（2002）の指摘のように終助詞で表されるなら、「ね」などと共起しにくく、使用頻度は逆になろう[8]。以上から該当形容詞の使い分けを見、背景意識を探る。

4. アンケートと結果

日本語母語話者、韓国人・台湾人・中国人学習者にそれぞれ試験的にアンケートを依頼し、以下のような結果を得た。アンケートは中間回答を可とし、設問は以下の 15 問である。

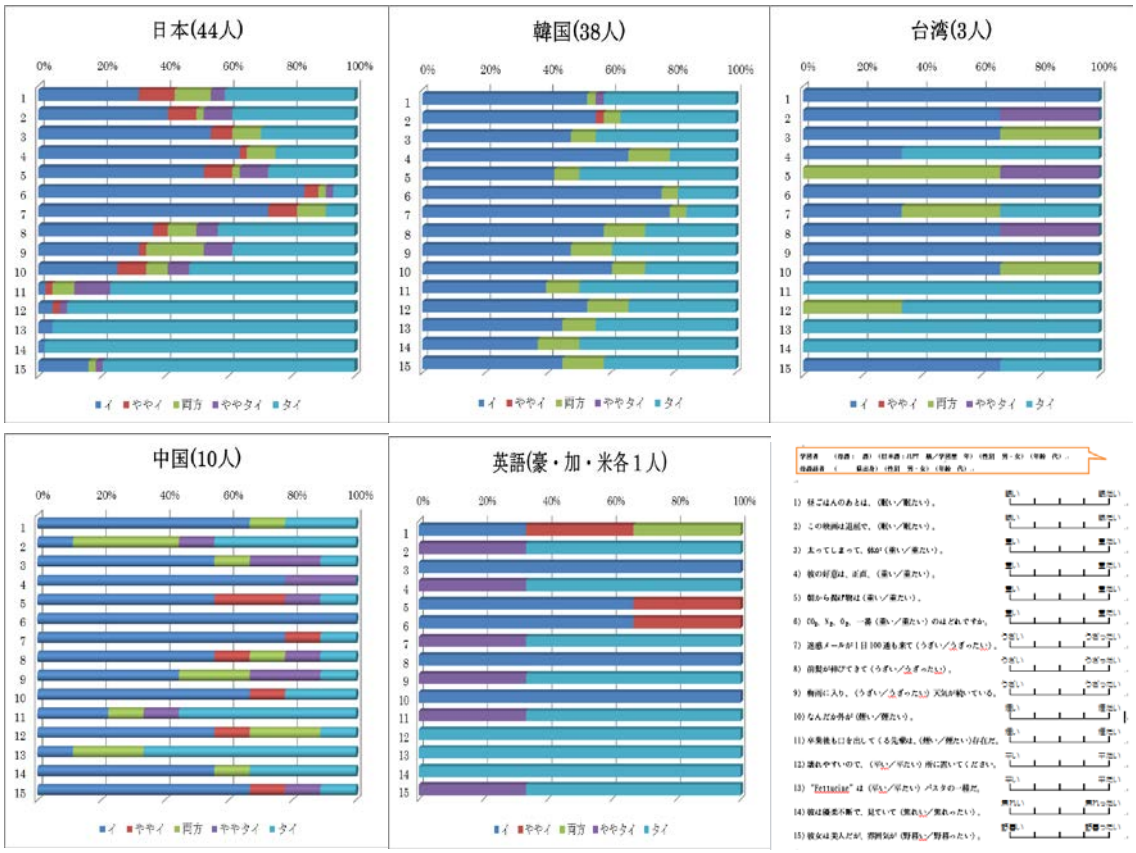

表 1　アンケート結果（国別）

4. 考察と今後の課題

以上のアンケートから、以下のような考察結果を得た。「-タイ」について意識的に指導される場面は少なく、学習者は「-イ」に偏るのではないかと予想したが、一概にそうは言えないことがわかった。しかし学習者の日本語学習歴や来日経験などを考慮する必要もあるので現時点での断定は危険であろう。また、日本人において、「ややタイ」の選択結果は「ややイ」に比べ少なかった。被験者へのフォローアップアンケートによれば、使用語彙と理解語彙、理解と自分の使用に差異がある可能性が伺えた。また、日本人が「-タイ」を使用する場合には、なんらかの意図があり、意識的に選択している可能性も伺える。

今後の課題としては、被験者の偏りの修正と日本人の「-タイ」選択背景をより詳しく検証し、「-イ」「-タイ」の使い分けと「(心理) 形容詞＋-ガル」、動詞との関係性を明らかにすることが挙げられる。また、今回のアンケートはすべて作例によるため、実際の使用例として小説や漫画などの例も考察対象としていきたい。ここで漫画を特に挙げるのは、吹き出しや字体などで心理的か否か、すなわち話者だけなのか他者にも共有されているのかなど主題との関わりが様々な手段から推察できるからである。以下に実際の使用例を示し、今後の課題への足がかりとしたい。

(…)ばつんと裾だけ揃えた黒い髪は、量も色も本人の顔立ちや服装に重すぎた。(p65)

(…)失態を噛み締めていたのだと分かってから思い返すと何という重い声だろう。(p81)

そのありがたくて重たい愛は、難聴になった頃にひとみに手話を学ばせようと(…)。(p130)

(…)両親が揃っていて重たいまでの愛情を注いでくれるのは当然のことだった。(p173)

(…)ひとみさん髪質重いし髪色も黒いし、長いとぼったり見えんねん。(p194)

(…)なんであんたは理容師にならへんかったと今さらの愚痴もついてくるのでやや重たい。(p194)

図 2　漫画・小説の使用例（「重い」／「

注

1） 国立国語研究所「外来語委員会」『第２回　外来語言い換え提案』(2003 年)による訳語は「自己認識」「独自性」「帰属意識」、外来語として「アイデンティティ」とカナ表記されることも多い。

2） 本稿では「主題」(THEME)とは、その会話の中で中心となっている話題を指す

3） 本稿では「主題」(THEME)に対する情報が多いほど「情報の共有度」(accessibility)も高まるとするが、各呼称は便宜上のものであり今後さらなる考察の対象とする。

4） 各国留学生からの私信、及び図１参照。

5） 但し「ウチ」우리及び一家人/自己人、「ソト」남及び「外人」(大崎 2008) (Lee 2007)他。

6） 他の３語に比べ新しい語であり、考察対象に含めるべきかさらなる精査が必要であろう。

7） 「ガル」は心理形容詞に付き、動詞化するとする。韓(2010)参照。

8） 使用頻度：形容詞イ＞形容詞タイ＞…動詞「煙かったね」「煙たかったね」「?煙たがったね」など。

参考文献

Lee, H. -g. (2007) A Pragmatic and Sociocultural Approach to the So-Called 1st Person Pronoun Wuli in Korean. Discourse and Cognition 14, 155-178.

庵功雄 (1998)「名詞句における助詞の有無と名詞句のステ-タスの相関についての一考察『言語文化』35 一橋大学語学研究室

巌廷美(2012) 「日本人と韓国人の言語行動における「ウチ、ソト、ヨソ」と「우리 (ウリ)、남 (ナム)」 - 主に敬語行動を例に-」 言語と文化, 15: pp.29-42 関西學院大学

神尾昭雄(1990) 『情報のなわ張り理論』 大修館書店

-(1998) 「情報のなわ張り理論:基礎から最近の発展まで」神尾昭雄・高見健一(eds.)『談話と情報構造』 pp.1-111,研究社出版.

-(2002)「続・情報のなわ張り理論」大修館書店

大崎正瑠 (2008)「日本・韓国・中国における「ウチ」と「ソト」: A Comparative Study of “ in-group” and “ out-group” among Japan, Korea and China」『東京経済大学人文自然科学論集 Journal of Humanities and Natural Sciences125 号』pp.105-127 東京経済大学人文自然科学研究会

韓金柱 (2010)「接尾辞『がる』の意味・用法-様態の『そうだ』と比較して-」『東京外国語大学 大学院 博士後期課程論叢 言語・地域文化研究』第 16 号 東京外国語大学 pp.271-284

鈴木梓 (2013)「情報の共有とウチ・ソト : 日本語に現れる「ウチ」意識」韓国日本語教育学会 『日本語教育 第 67 冊』

Markus and Kuwayama (1992) “Culture and the self-Implications for Cognition, Emotion, and Motivation” Psychological Review,98(2), 224-253. the American Psychological association Inc.

三宅和子(1993) 「日本人の言語行動とウチ・ソト・ヨソの概念」日本語教育方法研究会誌 1(1), 6-7

Prince, E. F (1981) “Toward a Taxonomy of Given-New Information, ”Cole, P. (ed.) Radical Pragmatics. Academic Press

参考資料

小玉ユキ(2014)「月影ベイベ」3 巻 小学館

有川浩(2012)「レインツリ-の国」 新潮社